



2007年11月、千葉県立八千代東高校の塩澤和博さん(左)らは、埼玉県の国際フェアに参加し、ベトナムの文化や習慣などについて紹介した

「プラモデルを欲しがって、生徒たちは目を傾げ、イメージを膨らませる。」

# 世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



## 第10回

# 日本の子どもたちに伝えたいこと

## 教師海外研修 in ベトナム(後編)

昨夏、埼玉、千葉、山梨県の教員が参加したベトナム教師海外研修。教員自身が現地で見えて、感じて、考えたことは、帰国後、授業でどのように生かされているのだろうか。それぞれの取り組みを追った。(ベトナムでの研修の様相を紹介した前編は1月号を参照)

JICAホームページ (<http://www.jica.go.jp/icapark/monthly/index.html>)でも閲覧可能



写真を見ながら、授業の構想を立てる内田さん(左)、教員それぞれがベトナムで撮影した写真は、ウェブサイトで管理され、参加者全員が活用できるようにした

心に残ったものを伝える  
「この写真で格差について伝えられないかな」「生徒に考えさせる授業をしたい」。3、4人ずつ、4つのグループに分かれた教員たちが、額を突き合わせてたくさん写真を見ている。

ここは埼玉県国際交流協会の一室。2007年8月下旬、ベトナム教師海外研修1の報告会(埼玉県)が行われ、研修に参加した埼玉県の教員4人をはじめ、開発教育に取り組む教員やNGO職員などが集まった。4人は現地で見つけたことを報告し、参加者とともにその経験を今後の授業でどう生かすかについて話し合っていた。

「本当の幸せって何?」  
埼玉だけでなく、千葉、山梨の報告会にも参加した埼玉県久喜市立久喜中学校の内田十詩哉さんは、「子どもたちの笑顔を通して、幸せについて考える授業をしたい」と言う。千葉県木更津市立木更津第二中学校の西克夫さんからヒントを得て、水上生活者の子どもが笑っている写真やビデオを活用し、ベトナムで見つけたことをクイズ形式で紹介する「ベトナム×クイズ」など、生徒が楽しみながらベトナムについて知る授業を行った。

「子どもたちの目がすごくきれい」と写真を見つめる生徒たち。内田さんから、使い捨てのビニール袋を集めて換金したり、ビーズのアクセサリーを作って販売し、細々と生計を立てる水上生活者の現実

を知らされ驚く生徒もいた。だが、輝く笑顔が印象に残ったようで「貧しいからって不幸なわけじゃないのかも」「日本の中学生より幸せそう」といった感想を述べていた。

「人」を感じる授業を  
一方、緑豊かな山中にある山梨県都留市立都留第二中学校の渡邊功資さんは、2年生の総合的な学習の時間や道徳、社会科の時間などで、07年12月から6回にわたってベトナムに関する授業を行っている。

約20年前から、社会科の教員として、生徒が主体となって平和について考える授業に取り組んできた渡邊さん。その中で常にこだわっているのは、学ぶ事象一つ一つに「人」を感じさせることだ。ベトナムを題材にした授業の2回目でも、プラモデルの空箱を大事そうに抱える水上生活者の少年の写真を見て、少年が何をしているのか、何を思っているのかなどを考え、一人一人の少年の状況をじっくり想像させた。一人一人の目を見ながら、次々に質問を投げ掛ける渡邊さんの声に、生徒たちは目を傾げ、イメージを膨らませる。

「空箱の絵を見せようとしている」など、生徒の意見を聞いた渡邊さんは、水上生活者の厳しい生活を説明した。そして、この授業の最後に、渡邊さんは「自分がドラえもんなら水上生活者の未来のために何を出しますか?」と問う。しばし考え込んだ生徒たちは紙に「じょうぶな家」「格差のない社会」などをつづり、ある女生徒は「普段私たちが捨てているものを宝と想っている人がいると知った。この格差をなくしていきける社会をつくりたい」という言葉を残した。

渡邊さんは、2月までに授業の続きを行い、ベトナムの貧困が日本人の生活と無関係ではなく、だからこそ「遠い国の見えない人々のことまで考えられる想像力豊かな人間になってほしい」と伝えるつもりだ。

ベトナム教師海外研修に参加した教員らはそれぞれ、現地の経験を生かして国際理解教育・開発教育の授業を行っている。その授業を受けた生徒たちは、地球上のさまざまな課題や途上国の現状を理解し、一人一人に求められる役割を考え、活動する一歩を踏み出すようとしている。



ベトナム語に訳された漫画『ドラえもん』を見せる渡邊さん。身近な話題から生徒の関心を引き付け、貧困などの重いテーマについてしっかりと考えさせた

1 学校教員が開発途上国の社会・教育事情やJICAの活動などを視察し、その経験を日本の教育現場に還元することが目的。  
2 開発途上国の実情を知り、国際協力の必要性を理解してもらうため、元青年海外協力隊やJICA専門家などを講師として学校などに派遣し、途上国での経験を生かした国際理解教育・開発教育を行う。